

ニュースポーツのゴール型球技における教材の適性

塩山 友貴 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 柴田 俊和

キーワード：ニュースポーツ，アルティメット，ゴール型球技

1. 緒言

新学習指導要領では、ゲーム並びにボール運動領域が従来の「種目」ベースから「型」ベースへと変更された。背景としては、種目固有の技能ではなく、「型」に共通する動きや技能を系統的に身に付けることが狙いである。ゴール型球技において、「ボールを持っている時の動き」(on the ball skill)だけでなく、「ボールを持っていない時の動き」(off the ball movement)をいかに学習させるかが課題である。

本研究では、アルティメットの授業を小学生対象に行い、ゴール型の球技の学習課題である「ボールを持っていない時の動き」(off the ball movement)を学習させることができるかどうかを明らかにする。また、ゴール型球技の教材としてアルティメットが適性を有しているかどうかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

大阪府 H 小学校の 6 年生、男子 12 人、女子 12、人計 24 人を対象にアルティメットの実践的授業を三回行った。さらに、診断的評価、形成的授業評価、総括的評価、ビデオ観察を行った。

3. 結果と考察

一回目の授業観察結果から、児童の視野がディスクやディスクを持っている人しか見ていなかったため、スペースを見つけてパスをもらいに行く場面が少なかった。このことから、児童の「ボールを持っていない時の動き」の理解度は低いことがわかった。

しかし、授業を重ねるごとに、多くの児童がスペースを有効に使い、パスをもらいに行く姿が見られた。このことから、「ボールを持

っていない時の動き」を少なからず理解できたといえる。アンケート調査の結果からも、児童の視野が人やディスクからスペースに変化し、全員がパスをもらえたことが明らかにされた。

ここで問題が発生した。筆者の「パスがもらえた」は「スペースを見つけて、パスをもらおう」ということである。しかし、児童は、「止まってもパスがもらえたら、それはパスがもらえたことになる」という認識があったため、筆者と児童の間に「パスがもらえた」に対する認識のズレが発生した。結果的に、数値は向上したが、認識のズレが生じたため、アンケート調査内容、認識のズレをなくすことが、新たな課題となった。

4. まとめ

アルティメットは、他のゴール型球技と違い、個人の技能だけでは得点を決めることができない。必ず、仲間と協力し、パスをつなげなければ得点を決めることができない。そのため、児童はどのようにパスをもらえばいいか、どのように動けばパスがもらえるかを考えるため、「ボールを持っていない時の動き」を学習することができる。

このことから、アルティメットが「ボールを持っていない時の動き」を学習するのに有効な教材であるといえる。

引用・参考文献

1. 後藤輝輪 (2010) ゴール型球技におけるアルティメットの活用と効果、びわこ成蹊スポーツ大学卒業研究。
2. 大島寛 (1995) フライングディスクの授業への導入、体育科教育 第 43 巻 第 1 号、大修館書店、pp.42-45。